百紀之雪

へ 5
6521

水音

ヘ5
6521
010186022144

卵料理

むかし吾朝の味の方の具に鶏卵をとて
焼もの吸もの料理に庖丁をもちひ其風
大坂京江戸の名手を尽くし異国の料理の
志ある人本法精志をもつて八百の品数
杭州料理の味をそへて調味を試み家に
伝へ置る後々の便となりて事つらね事ハ

月洲摹

こゝに蕉翁の流をくみて此庵の蔵せしも
再び画をうつさんとしも節は一句を
きゝ付て芭蕉翁をしたひて申すなり
百とせ経の月の音や芭蕉庵

明治三十年六月
月阿 東思堂主人

景福田[illegible]図書

明治三十年六月三日於祇園有樂舘興行
開祖闌更居士一百年忌追善
脇起俳諧之連歌

闌更居士

保ちきれぬ露はきえて起上り

月の秋しる楼の露　楓湖

雨あかり堰の音のたえまなく　素石

石盤入まし鍛冶きこゆる　露翠

二人ずつ帰りくるりと峯のかたへ　柄年

撫下ろしけくもいふ事も蜜ふ　好古

懐しつまさ行燈の蓑子に読らん　梅雄

おん明り紅葉山の檀　楓崖

青芝に清陵ある紀くれぬく　五梅

玉暁もしゆる一寸の占　桂陰

見通しに読みも積みあひ　踏く

かさねて紙を吹きくれ　月湖

納の津れ遊びも旅のうきらし　薗和

紙布を振ふ紙なりとれ端　長旭

架稿り寒の入る秋のあやさむ　琴湖

穂さき色つく満川の巻　鶴遊

露ある月も宮汝のあまくと　一潭

今様ひとまうふ極まれ　棠石

無駄事りいらぬ古巣を嚢にの　桐陰

すけ木像いても次てれ　雨石

浪なりし根おちた流れの記号　九岳

探る影し霧の眠りつ　椎雨

二オ
二日食荒帰道にまく刈る　心悠

又たとは謙義も猶豫の内縁　楓翠

衣ゝと花まへしものかあすもし　茶遊

珍らしき窓に聞ゆる言紀　玲嶺

飯ほとけ手向のくさ谷の洞　北湖

あらはちみ漕ぐ沖のいさりや　水玉

良好な九本ゆるされ家まで　一挙

枝は北郷へ籠ていつき迄　黙ゝ

許多見え始めなる酒と素い呑量　稲畝

えいて香焼し包む菓子人　楓月

昔なら賀競わ奈てりうき世れ　静浩

路陰一蓋れ晩音頼る　艸雨

松鶴棲く古き鎌茎月の宿　泰山

木挽らしに棲むなる萩　友雉

二ウ
野あはれ混濁紅とふうして　逸昇

節の鳥月も花かるゝし　梅隣
序まで以ふる張まぬ袖瀬請　松楊
ましやと思ふ奥のさゝやき　梅亭
夕照りに乾よふりゆる戸濡酒　可涼
時雨遠へ廻る渡風　吟月
さうしまま幼別條を楽おに　可耕
我表里なら吉原の浜し　松路
今宵も余りも寂しや遊ぶなり　須臾

月さへのうちに行ふらむ鐘　柳典
うつりと数ゆれる銭うちぬ志　瓢磯
茶の湯をならしむならむ長尻　ちの女
花清し隔つのうちに香を破り　南風
菜若ミけるあれらうへ　寒雨
三十 あちこちれ年賀扶扇も長なれや　寿龍
なく子にとゝせ絹屋錦眠　素堆
練無れ足並揚ふ霧やしき　序悠

渦巻く水に氷塊る川　東英

板囲ひありし久しき明地面　松窓

井けたいたまれ古し古井戸　新水

浄土宗の御堂を訪る翁の忌　環洲

生活難捨んて子めを追ひ入る　桐栽

うれむきし米の相場の途端　素英

丑寅の温気纏はる名残も　一昇

小雲の存瘤角帯肩脱て　鈍叟

抱かへし見る樟の大木　清月

薔薇に寄りうつり盃の月　泳暁

切子燈籠の紛れに絵をかく　遊嗣

三ウ
盂蘭盆も済む信心深ふ踊ら我手　長旭

気のりきり伴し睦みの笑　沼舟

次第となれ鎌山の津入りあふ　梅雄

客志うつしく縁の移ふ　露翠

名み隔正しき中を藤活する別　栖年

旭うやく霧吹のいろ　楓崖

折さ紙の清水たのまれ小島　木外

以外も飛脚の背をまたね　藍水

包むまで風折烏帽子驚あり　好古

恋りさまで能の奉納　可然

篤路り森明起きれまさし　桃月

八十以頭のあし無か　琴湖

座あと罪も飛淡さ不位行よ　岱遊

されと情ある人たつねきて　北湖

稲荷引の形に似をね菖　珍岸

敬聞くまで淡み行り　月湖

暦さへ掛けられ紙つまる　孤月

鉢鐘料る市れ霧の水　一拳

狀同り太鼓打手来さやし立　茶遠

治療る御寮も去り出かふ　楓翠

似うても衣笠山の見あかせん　桂隠

諸は夫婦に聞きやすき　水玉
湯あかりの身にかけれ蔦作　桐径
籠の蛍に衣振くやつ　棠石
枝垂し松をとらまへの僅り庭　韓径
芋うけ夢麦に唄くらしく　雨谷
月の秋古家ときちる世の暮の　鶴畝
見りこと続く江戸も在撲る　参雨
ナウ
肌見越しされ掛り物の背須く　京 蘆外

己むり持せて逃れ傘　霞球
大丸は家まとをの基とう詠　清泉
店賑りするつ類の家をつく　艸雨
電信りこころ尽しれ歌一首　松柳
打数も五もち瑞まるたり川　梅窓
面と世紀ふるふの法会に花咲て　稲處
拝むゆしら鳥の囀る　執筆

満尾

東京

義はしられ雲すむや秋の声　風羽

剣に見れ忘ひさつかし萩の花　永樹

風流を書てそねく百合の花　喜宣

いく穐りさみりてなふの手向かな　梅年

末さ女やみれ少し月の風葉石　薊浦

重る日やけしのさかり咲そめて　千畝

雲れしきりになるや夕さくら　一学

顔ゟ十にむくしの花哉かな　芦志

作るは人也寄るなり夜木立　花路

洩人は去る謡も涼し閼伽の身　採花女

あかりうし紅葉も夜はなせ哉　雪人

五月雨は日月ちつき暮りうれ　孝節

菜やかや菜り孫またね今宵ぞ　来風

恋になせれ本を作ぶる哉りうれし　五梅

加賀

まさしに落葉をへる手向哉　南立

君来れそうしをりつに時鳥　賀兮

鶯ひやる多そそ残りれ出し山　招鶯

聞りけふかけるみ霰や東山　東洞

京もれ古もけて供し綾うれ　洗雪

尾張

あだ津そう多ふ吹きさせ雲居　雅游

竹椽や百合なてしこむ手桶　素陽

すゝましさ露も見る日や峰の空　杜蔑

扇にも紛れかゝるれ光りこれ　羊山

うす涼しさやもとさせの松桜　竹涯

秋となる蘭れ香さそふ東山　中庵

よるの糸諸ゑし芦銭みかゝる　義岳

まちさせれ伊くまてを岩清水　可洗

五月雨れ走りてりうけんさせを陰　荷庵

鹿れさひ坂寄りのあとも只ならん　其彰

さとせれ筝ならしや夏の茄子　松塚

みふらに来来れ狩るへ影のうし山　二遍

歩ら帰れさけをしもりよ出牛の空　可翠

森し香れころり動く名も桜花　眉長

黒みつの紅水すゝあるさの林村れ　可竹

とう雪の香ひよきまゝぬあやめ見る　池月

悋す経句うら詠を　不回忌　標粉

美しくれやとゝくきみふの如りハうく　静文

冥ふ香もこゝ諸も淡く銀の蓮　呑堆

藻れにも影や流れてつきぬ咲處　旦兮

さゝせれハうるか浮しぶ滞法哉　尾窓

名椎れ雲きりしなけ本立　専雅

冬河

あふく空さく久ふも吉やはちまん　石芝

涼けさや若なつられ若蓮哉　魯石

浄安り咲と香し蓮の花　示高

苔れさな石牌かりと一蓮字　雅石

江の影れ流れふく流ぬ夜の月　風裏

暑さ先と清ふまゝいやされ蓮　鳥岳

法の道わのりと風れ葉あり　箭澄

かくにみぬ空楽し蔵る山　苦心

かけしらふ松も深や泳の聲　南海

句集れ但ゝ芽ゝしや其の面　大訣

遠江

うなゐこの針や藪れ夜木立　十湖

面影れ月夜と遠のかさゝな　木潤

雨すしく宵はゆのしや明るまた　駿河　可然

日向より夜なからの寒されな　伊豆　連阿

とうさせれ香石脚や苔の窓　武蔵　雪叢

参りり鉄南ふるや月この梗　上野　歴山

ほとゝおれ来なけ西より東山　下総　得分

をみな桜あはれし梅よれ東山　出羽　吟風

陸奥

ほとゝけの雲井りかつや啼き　序代

道菊れ寂なりうしや飯しめり　東英

あみかのし箱れ日向や遠の花　松窓

紅のゝ錦と照てうのしるく日向れ　道詢

いさよりしく妙るに庭や夜の月　其昇

風あや桜にしくうるゆふへぞれ　信濃　帯心

さゝ葉の根縫ひまく芭蕉かな　信濃　滸聲

あら鶏のふけうとや苔の花　越后　晴雲

ふとせしならぬ梯の花さかり　文邑

山遣やそゝろに南無の口すさみ　越中　枚岳

杜鵑素足のまゝ待はつけなり　越前　楳水

参るなり先つ出抜かき牡丹かな　能登　雲丈

ほとゝきすそれも夢なし東やま　竹臺

降濁もさとちるやむらさきかな　素英

うり神の汲く無紀清水のれ　新兮

ふ葉綿のふ郭田風の薫りけ程　桐栽

柴のかり世さの所くも苔かな　環溪

美濃

傍や古蔦のかれさくらの実　藍庭

はなし舟やそゝ世たゝふ日向哉　萱波

作のかりふうき蔵りのひの山　如竹

ほとゝきす河も来るや帰るなり　秋深　雨易

近江

梅とりふ白ふや昔れも咲く　魯人

墨れ銚ゝ世のいまも風ゝ家　九峰

さけ角ゝ咲し牡丹れ手際かな　洗玉

新つくや碑のみけ角の紀夜来立　枕月

ぬるきし梅れ本影や風涼し　静人

松ゝ咲るしく白菊れゆきとり　湖松

古き人のこゝろしもゆるや土用干　湖月

菊谷れなつれと立つふ蛍ゝ野　香雪

なつのしき庵の門や桐の花　一楽

立ちれ花れ新れ出し夜来立　活月

旅の木れゝまゝなる藤や風薫る　呉嶽

寿あるけれ遠吟りすつりく

伊勢

地をもしるかけ梅ゝし時鳥　耕雨

ものし喋寿紫ゝの白されのひくつし心　寄青

ほとゝきすしのふるさゝれ佐藝かれ　社楽

白芥子やちふきゝせのこゑ中ふ風　可同

露ふかれ吟さ夢路悲しく古男子　一峰

ふる塚のかげをうつして白句碑　紫濤

あはれ知人まち見けぬ芥子の塚　追青

筆塚すゝむ道の夢や新緑　得水

追そらくお茶ある碑や苔の花　大和 傷間

古池り句碑の名のし蓮の花　花久磨

蓑ふさるや名れ雲さへ白ふ尾　常春

きく蓉や苔れ花も瑠璃の露　泊鶯

碑のかげれ流毛をつきん苔の花　如萍

柳競りたてる露やさみの花　雲分

香華れ風のかり新茶の香　輝月

碑を探る道のしをりや苔れ花　春

紫さくられうすや苔のしたもと　美人

百とせ後弟子に庵やうらの楓　同名

浪花

あけのしき芭蕉寂やはせをの句　北叟

もゝとせれ昔やめぐるはせを風雅　あき呂

今日の日にさくらもゆかしや百会む　公美

ありし昔うつらぬ庵や夜木立　支仙

百まつりいまもむかしれとせ経ふる　特畝

学伝ふ流を志つはし昔しろ　露遊

百年もうつらぬ梅この残りけれ　雅翁

もゝとせれ巌も月なや はせをの句　其香

百めぐりさくらえやすし此湯　森六

蕉翁祭しや むかしゆかしき芭蕉の記　李翠

百年も百まつり栄ゆ百とせ経うる　沼舟

満るや もゝとせ経りし木の根より　素梢

もゝとせれ百とせ経りし久昔の記　北浪

能もり 庵かり百まつり芭蕉の和　遊華

蓮の香や佛の道に風涼し　光石
ねりかけし宮をいつしや雷魂　照良
小蓮浅くなかに句やあさ恩　淀樹
ゆくとせに葉の香の音みのむ　春塘
蓮の葉をつたふ雲とも向これ　山石
それ流を汲めは白ふや花菖蒲　耕田
ほとゝきすなかと苦しひのし山　須磨 露塘
新藻に汀ありや行子　神戸 帰雲

蓮ひらく音持ちけりや月の鐘、　如月
眼をくらますふかし芥子の花　土伊丹 遊昇
播磨
三日月に新たふしや入梅の空　笠雅
ゆくとせや花を賤にまて宮　鏡花
鵜舟しくれ宵に鳴る郭公　三粒
湧る清水にむかん塚の前　香枝女
ゆくとせに来ぬ夏と啼や田ほとゝきす　千艸女

こゝろせはふたしかの色不如帰　詮之

出雲

閑叟居士百回忌追善
佛をおこせの前にはあれもひとしほに
あはれのしく拈香奉りしく

ほとゝきす昔をおもふ夜寒れ　曲川

咲てのこる花も燕も麦秋哉　好一

水と節りきゝらき流れや杜若　跡卒

備后

風葉のまとひやちるつふ香おもし　桃渕

日向さや多き一まんの白牡丹　田柳

おり紙を耳りかくほろゝかな　一枝

葉ちくらやむうし流れ音のこと　梅生

月涼しこゝに机の露ところ　松塘

安藝

うき名り花橘の香もおもし　曲池

玉葉の白ら白るゆかし笠の雪　荷風

周防

雲の紅捻子のとしくやさくらくの実　素謙

月影り寂し庵やわすれきた　梅松

香をちるに流れをくむや苺清水　而緑

ほろほろと聲に気より慕ふられ　鴻花

日向ぼや つくりし茶の子二三杯　松雲

關御り流れて柱を流れて若清水　讃岐　其海

黄菊の影見る法のむしろかな　不如帰

五月雨のなかや しらぬの滝まきる　伊豫　蘭晥

菊谷の流れ出てふや寒の鶴　松梯

蕣さくや今も昔のまゝの影　亀六

ゆく春に泊る家のあるじ哉　つね子

月入て淋しさ増る涼みかな　朴風

いくとせも変らぬ色や梅のはな　亀水

小松原日出るころや初かすみ　梅窓

豊前

藤の花姿やよるの日向草　素水

玉菊の魂や月夜の時鳥　琳史

こゝら鶴の詠ありけしや桜の実　嵩影

たてまつる衣や夏の暮れ下り　素文

ありのしくさや百合せの夜木立　芝香

百年の風のきるなりと世線堂　好鶏

家する残りて灯をめしけり　豊後 竹窓

涼しく翻の衣の清さや黒つゝじ、　西鱗

葉桜や根のむしろ墓しれ、　諸雲

東海をしきりにはふく扇の香　筑後 楓陰

静さやうき世を聞く牡牛　美作 旭翠

日向さや小蓮露のしまかな、　蓑の舎

絶えさぬ香のかをりや夜木立　丹波 浩高

古塚の詠と桜したりや不如帰、　鷺山

西されて月一りんの青田の香、　栖霞

日向の寒竹のなけりけり時鳥　但馬 木軒

丹後

小鳥まで ぬれぬや 蓮の葉ある花も　鶴甫

碑や 蓮 菖蒲とならへ人の　旭角

日枝の峰や 暮れゆきしき 法の花　みやり

啼しとて 霊魂 慰さんはなれ　徳富

実もなみ 流れをつきし 道の花　睡一

集と経て 名月 惜まれて 横られ　柳哥

入る月の あとに 静かな 木々の花　世分

京都

鳥の声 麦畫つとめて 百世かれ　福文

涼しさの 流れて 声や 瀧の花　連楼

冬の庵の 寂哉 月照り 目をさむ　南風

通し見ん 清水の 奥の瀧　一潭

老女の 庭ないしや 昔のむ　九岳

葉の香や 定め 暮れ 秋もすみ　寿翫 七十叟

夜の秋の 月や むかしを 眼のあたり　梅は 素山

一雨遅おくれ音やけりおそ寺　柳典

百年の夏みる松を惜くるゝ　稲畝

蝶なくや形まては庭の鉄　桐陰

世の中を忘れて涼し岩谷　木多

若竹の節もさしけり百合ぞ　宝石

ひと雨にさそはく清し芥子の花　雨名

蓮の花ゆき残る向ひの花　芝山

なくなくも世は老ちてゝや春芒　ちう女

さしあれ伊賀紀夜時雨　椎雨

菊谷の流れは絶えに蛍の蝶　跳砕

居古哀えて志のぶ昔のしや古用干　琳暁

香はけ深おもひみえるへ不如帰　聴秋

ちりかゝしや手経てし庭の芭の花　梅雄

又句成るかも川原さ之れ　露翠

墨の香のうつに等し古扇　好宝

なれ親の限なくてもや夜の月　琴游

百合咲や日向の淵を庭また傍　蕪外

下多し蔵りなつかし庵の庭　桂浪

樵の斧昔忘れしうちはかな　路之

樵はるゝや沼にはかに陰雁経　白悠

著槿や余所にならさき庭の苔　長旭

ありうし来旅人をまつや出用千　月淵

行ふとも出てうちにたえなれ　茶遅

樵子とうるさうつまれ日向かな　珍嶺

ありうしなかさ人隣をかき分るゝ　北淵

香来れ流きもきらう日清水の音　一巻

ほのきたれ秋の伊れなりうしぬ　點々

松風やまるにしれるゝ旅の気志　重妙女

さみたれやとうとさむを志の上禮　静弦

なつ来れ露や日向れりう衆　艸雨

詞うち常まともあゆきはたくらうの銭　孤月

粟柿も色きく日なれ法会かな　吟月

凉しみて耳にこたはゆし瀧の声　水玉

夏なきや人の向れ茶かまくれまち　蓼雨

夕顔り似る息とまりて鳥の足　可耕

蓮れ香や砂りしら通り雨　可涼

出捨るゆきさぬ耳やほとゝぎす　松峰

ときき連の掛ふて涼し苔の庵　嘉隣

折毎し地ふれ涌るやなけの月　鉄叟

常れ老帰ゆくりし法の庵　楓翠

しのゝめとこゝろ語る咲や志も草　悠遊

隠秋やたゝ志ゐしき露れあと　楓崖

又さらけのいさを荒し苔の花　栖年

たのまれ何れ幸あるに法会より留守に法会より あまたれ芳吟を綴りて梓と松露の密かを眠の待るいとう捨し

志ゝつしこゝろに秋露も帰よこの夕　楓球

雙林寺芭蕉堂記

往昔西行頓阿蹔遯双林寺下者世之所通知也近時芭蕉老人亦在斯寺而有柴戸之句矣加以人半化翁慕蕉門之俳諧而宗匠乎一時者也亦誅茅于此歎塵分風月者今且五六年矣翁嘗藏五老井許六所手造蕉老人之肖像者久矣今茲創一宇小堂而安置厥像是蓋旌奉崇歟

衛之誠也且使同好之士遊于俳諧也亦好事
之為哉公美卜隣于龍島郎居恒與翁相
善丁堂成之日翁請公美以記其顛末於
是乎聊書以塞厥責云 訴

聖和天明丙午年菊秋

古渓海彦根藩文学伏水龍公美識

此記成雕于石而樹于桃青堂側當時
半化閣更翁始逾一紀而逝焉至明治

卅年丁酉正于百年矣即今堂主
山鹿机城老大宗匠修舊事美定也
継池大雅遺緒而傳閑翁常戯学
書于九霞因浮定誌之云嗚呼芭蕉
翁後百年而有梁更翁在焉閑更
翁后百年而有机城翁在焉後生
可畏自今而後百年更有俊傑出矣
蕉門之運可不謂盛且大乎

帝倭明治卅年丁酉夏日
六羽逸士大雅重定亮

富田藏書